



画像① 《黒麻地几帳に桐文様帷子》

江戸時代・17世紀末～18世紀初、当館蔵（前期展示）

特別陳列

日本の伝統文化を知る

江戸時代のきもの

Kimono in the Edo Period

令和6（2024）年7月13日（土）－8月25日（日）

主催・会場 奈良県立美術館

日本伝統の装い、きもの一今もなお見る人を魅了する美と技の世界

展覧会の趣旨

日本の民族衣装として認知され、礼服や晴れ着として着用されている「きもの」。きものは古くは「小袖」と呼ばれ、室町時代ごろに表着として定着して以来、日本における一般的な衣服として着られてきました。明治時代になって本格的に洋服が導入され、またそれが時代と共に普及しても、きものは日本の文化を象徴する衣装であり続けてきました。現在でも七五三や成人式といった節目では多くの方がきものを着ますし、夏祭りの夜にはゆかた姿で出かける人をしばしば見かけます。着る機会こそ少なくなりましたが、ある種の憧れと親しみを感じさせる、魅力的な衣服だと言ってよいでしょう。

そのような「きもの」ですが、分かっているようで説明できないことも多いのではないのでしょうか。きもの前身である小袖はいつから存在し、どのような経緯で主要な衣服になったのか。形の上ではほとんど同じに見える「打掛（うちかけ）」「帷子（かたびら）」「単衣（ひとえ）」などは、どんな違いがあって呼び分けられるのか—このような疑問をたどっていくと、日本の服装の歴史や、きものに関わる素材や技術の多様さを知ることができます。

本展では当館所蔵の吉川観方コレクションから江戸時代の女性のきものを中心に展示し、日本の伝統文化の一つである「きもの」の変遷を振り返ります。当時の技術と意匠によって生み出された豊かな服飾文化をお楽しみください。

出品件数（予定）

120 件（出品件数の合計） ※会期中に展示替えあり

作品種別の内訳：染織（小袖類・帯・裂など）99 件／絵画 18 件／版本 3 件

展示件数の内訳：通期展示 57 件／前期のみ展示 33 件／後期のみ展示 30 件

展示構成

序 人生の節目を彩るきもの

きものを日常的に着る人が少なくなった現代ですが、七五三や成人式、結婚式などで、きものを着た人は多いことでしょう。ここでは伝統の衣装「きもの」と私たちをつなぐ、人生の節目を彩ったきものをご覧ください。

第1章 「きもの」はいつからあるの？—きもの前身「小袖」、その成り立ち

日本の伝統的な服装である「きもの」は、かつて「小袖」と呼ばれていました。公家たちが着ていた大袖形式の衣服に対して、袖口が小さいことに由来する呼称です。上流階級の人びとが下着として着た小袖は次第に表着へ昇格していき、一方で庶民が着ていた着衣は生地や装飾の質が向上して、多くの方が表着として使用する衣服として定着しました。それが室町時代のことと考えられています。この章では、きもの前身である小袖がどのような経緯で日本の衣服の主役となっていったのか振り返ります。

第2章 きものの種類いろいろ―着方、素材、着る季節

「きもの」と聞いたとき、私たちはだいたいのイメージ上下がひとつづきになっていて、帯で締めて着るもの一を思い描くことができます。その一方で形はほぼ同じに見えるのに、「振袖」や「打掛」など違う名前呼び分けられていて、複雑に感じることもあるかもしれません。こうした名前の違いにはどんな理由があるのでしょうか。木綿で作られた「布子（ぬのこ）」、夏に着るための裏地のないきもの「帷子」や「単衣」など、その違いに注目しながらいろいろなきものを紹介します。

特集展示 帷子の模造を試みる

夏用のきものである帷子は麻の生地で作られています。上質な麻布として長い伝統を誇る越後上布（えちごじょうふ）を用いて江戸時代の帷子を模造する試みが進められ、館所蔵の帷子から4領を選んで模造が試みられました。本コーナーでは完成した模造と原作品を共に展示します。

第3章 江戸時代のきもの一技法の発展と意匠の変遷

衣服の主役になった小袖は、表着として最も目立つ位置で着られるようになり、また形という観点でも完成されたものになりました。すると、小袖に備わった裾から肩まで連続する大きな画面にどのような文様をあしらひ、装飾を施すかに力が注がれるようになりました。この章では江戸時代のきものに見られる技法の発展とデザインの変遷をたどります。

第4章 身分による装いの違い 武家の小袖、公家の小袖

性別・年齢・身分を問わず着られるようになった小袖ですが、着る人の身分や階層によってデザインの傾向が分かれるようになりました。このコーナーでは身分ごとの特徴に注目して、武家の小袖、公家の小袖という観点からそれぞれの特徴を紹介します。

本展の見どころ

1. 吉川親方コレクションから約100件の染織作品を展示

日本画家・風俗考証家として活躍した吉川親方から当館に寄贈されたコレクションには多くの染織作品・資料が含まれており、特に江戸時代の女性の服飾については充実した内容になっています。この展覧会では吉川親方コレクションから約100件におよぶきもの・帯を展示。この規模で展示するのは2011年1月の館蔵品展「小袖～近世服飾の華～」以来、13年ぶりとなります。

2. 館外からの出品作品にも注目

当館所蔵の作品に加え、館外から出品される作品も見逃せません。江戸時代初期の《まつかわびしだん こもんよう松皮菱段小文様小袖こそで》や寛文小袖の名品《こいちやあさじ きくしゆる もんようかたばら濃茶麻地菊松文様帷子》（ともに京都国立博物館蔵）は、いずれも重要文化財に指定されている貴重なものです。また、昭和初期に室町時代の小袖として復元された《べにねりぬきじ ゆきわ まつはなつなだんがわりもんよう こそで染織祭衣装室町第7号》、《べにねりぬきじ ゆきわ まつはなつなだんがわりもんよう こそで紅練緯地雪輪松花綱段替文様小袖》（ともに公益社団法人 京都染織文化協会蔵）は吉川親方も考証に参加したもので、制作に当たった当時の職人たちの技術の高さがうかがえます。

3. 江戸時代の帷子を現代に模造する試み、その成果を原作品とともに展示

麻地で仕立てる夏のきもの、帷子。このほど数年にわたる歳月をかけ、伝統ある上布として知られる「越後上布」（重要無形文化財）を用いて、江戸時代の帷子が模造されました。その成果を原作品とともに紹介します。

▼展覧会の基本情報と来館案内

主催・会場

奈良県立美術館
〒630-8213 奈良県奈良市登大路町10-6
TEL 0742-23-3968/FAX 0742-22-7032/テレフォンサービス 0742-23-1700
美術館公式ホームページ <https://www.pref.nara.jp/11842.htm>
X(旧ツイッター) アカウント @ArtmuseumN フェイスブック @narakenmuseum
インスタグラム nara_artmuseum

会期

令和6(2024)年7月13日(土)～8月25日(日)

※一部作品は展示替えをいたします。

[前期] 7月13日(土)～8月4日(日)

[後期] 8月6日(火)～8月25日(日)

後援(予定)

NHK奈良放送局、奈良テレビ放送、奈良新聞社、西日本旅客鉄道株式会社、近畿日本鉄道株式会社、奈良交通株式会社、公益社団法人奈良市観光協会、奈良県教育委員会

開館時間

9時～17時(入館は16時30分まで)

休館日

月曜日(ただし7月15日、8月12日は開館)、7月16日(火)、8月13日(火)

観覧料

一般=600(400)円、大・高生=400(200)円、中・小生=200(100)円

※()内は団体料金(20人以上)

※障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳(アプリを含む)をお持ちの方と介助の方1人は無料

交通案内

近鉄奈良駅 1番出口から奈良公園に向かって徒歩5分

JR奈良駅 東口バス乗り場から奈良交通バスにて5分「県庁前」下車100メートル

▼会期中の催し

会期中の催し

(当館主催事業)

◆講演会「江戸モード史を語る! 唯一無二の奈良県美きものコレクション」

講師: 小山弓弦葉氏 [東京国立博物館 調査研究課課長]

日時: 7月21日(日) 14時～15時30分 (開場: 13時30分)

会場: 当館1Fレクチャールーム(60名・当日先着順・13時から整理券配布)

◆美術講座「館所蔵の帷子を模造する一制作を通して見えたこと」

講師: 飯島礼子 [当館指導学芸員]

ゲストスピーカー: 北本益弘氏 [(有)北本染芸]

日時: 8月11日(日) 14時～15時30分 (開場: 13時30分)

会場: 当館1Fレクチャールーム(60名・当日先着順)

◆担当学芸員によるギャラリートーク

日時: 8月3日(土)・8月24日(土) 14時～(約1時間)

会場: 当館 展示室

※いずれのイベントも参加には当日の観覧券が必要です。

ギャラリー展示

ギャラリー展示「奈良晒^{ならざらし} 一麻から糸へ、糸から布へ」(入場無料)

[協力] 月ヶ瀬奈良晒保存会

高級麻織物のひとつである奈良晒は奈良の名産として知られ、江戸時代には「麻の最上は南都なり」と評されたほどでした。のちに他産地との競争もあって生産規模は縮小していきましたが、生産を継続する努力が続けられ、1979(昭和54)年3月には「奈良晒の紡織技術」が奈良県無形文化財に指定されました。その伝統的な技術を伝承するため活動している月ヶ瀬奈良晒保存会による展示を1Fのギャラリーで開催します。

◆糸づくり(苧績^{おづな}みと撚^よりかけ)の体験 ※参加には当日の展示会の観覧券が必要です。

…原料の麻の繊維を均等な細さに裂き、撚りつないで糸にする「苧績み」と、経糸を作る工程の一つ、「撚りかけ」の作業を体験できます。

7月28日(日)・8月18日(日)

開催時間・定員・申し込み方法などの詳細は当館ホームページにてお知らせします。

取材のご依頼

広報に関するお問い合わせ

奈良県立美術館(展示会企画担当: 指導学芸員 飯島礼子)

〒630-8213 奈良市登大路町10-6

TEL 0742-23-3968 FAX 0742-22-7032

広報用画像リスト + 作品の一言解説

◇展覧会の広報用に以下の画像を用意しております。ご希望の画像の番号（1～5）をお知らせください。

◇必ず下記のキャプションおよび備考欄の展示期間もご掲載ください。

ただし、ルビ（ふりがな）を付けるかどうかと制作年代の掲載は各メディアの判断に委ねます。

◇掲載にあたり作品部分のトリミング、文字載せはご遠慮ください。

No.	画像	キャプション	一言解説	備考
1		<p>《黒麻地几帳に桐文様帷子》 （くろあさじ きちょうにきりもんようかたびら）</p> <p>江戸時代・17世紀末～18世紀初 奈良県立美術館蔵</p>	<p>「帷子」は麻の生地で作られていた夏用のきもです。本作では几帳と桐の文様が明快かつ華やかに表されています。文様の配置や各所に施された大粒の摺^{すり}び^びたの技法から、元禄（1688～1704）ごろの帷子と考えられます。</p>	前期展示
2		<p>《納戸紗綾地杜若秋草松文様振袖》 （なんどさやじ かきつばたあきくさまつもんよう ふりそで）</p> <p>江戸時代・18世紀 奈良県立美術館蔵</p>	<p>元禄ごろに発生した「友禅染」の技法は、多彩で繊細な表現を可能にしました。本作でも杜若や秋草、松などの文様が友禅染で細やかに表されています。江戸時代中期は帯の幅が広がっていく時代でもあり、その影響もあって腰から下に文様を配置したきものが多くなっていきました。</p>	通期展示
3		<p>《萌葱紵地薬玉文様単衣》 （もえぎろじ くすだまもんよう ひとえ）</p> <p>江戸時代・19世紀 奈良県立美術館蔵</p>	<p>絹製で裏地のないきものを「単衣」と言い、夏季に着用されました。本作は襟先から裾にかけて、薬玉の文様が白く染め残されています。薬玉は5月5日（新暦の6月上旬）の端午の節句に使われた飾り物です。夏の到来を連想させる文様の単衣です。</p>	通期展示
4		<p>《鼠紵地富士雲龍夕立文様単衣》 （ねずみろじ ふじうんりゅうゆうだちもんよう ひとえ）</p> <p>江戸時代・19世紀 奈良県立美術館蔵</p>	<p>江戸時代後期のきものらしい、粋な趣向の単衣です。肩には雲を従えた竜の姿が堂々と、裾まわりには突然の激しい雨に慌てふためく人びとの姿がユーモラスに描かれ、夕立の光景が生き生きと表されています。</p>	通期展示
5		<p>《紅絹縮地海浜春景文様単衣》 （べにきぬちぢみじ かいひんしゅんけいもんよう ひとえ）</p> <p>明治時代・19世紀 奈良県立美術館蔵</p>	<p>江戸時代になると公家の女性も小袖を着用する場面が増え、やや大柄な花鳥の文様を刺繍でゆったりと表したものが着用されました。本作は明治時代の単衣ですが、その古風な趣に江戸時代の名残と、流行に左右されない公家の女性の好みがかがえます。</p>	前期展示